

# ネットワーク資料保存 第127号 2022年3月

日本図書館協会  
資料保存委員会

## 連邦資料保存センター (FDCC) における活動(3)

-ロシアの多様な書写材料と修復・保護-

吉川也志保

平成 21 年度研究者海外派遣基金助成金(優秀若手研究者海外派遣事業)にて,ロシア連邦資料保存センター (FDCC : Federal Document Conservation Center)へ 2010 年 4 月から 6 月末までの 3 か月間派遣された際の活動について紹介する。

滞在中は,FDCC を通じて,複数の世界遺産地区,多くの美術館や,研究所への訪問が実現できた。そこでは,ロシアの文化が非常に豊かであったということを示す多様な歴史的遺産を目にした。資料保存においては,資料の媒体や書写材料に対する知見も必要な情報であるため,本稿では,FDCC そのものの活動とともに,日本ではなじみの薄いロシアに遺っていた特有の書写文化についても紹介することとした。

### 1. ロシア国立図書館の歴史とコレクション

ロシア国立図書館は,モスクワとサンクトペテルブルクに存在するが,FDCC ではサンクトペテルブルクにある方の国立図書館を調査対象にしていた。サンクトペテルブルクの国立図書館

はロシア最古の公共図書館であり,1795 年,女帝エカテリーナ 2 世によって創設された。今回は,保存対象としてのコレクションと歴史についても述べたい。

エカテリーナ 2 世は,フランスの啓蒙思想家とも文通による親交があり,ヴォルテールとデイドロの蔵書を,それぞれの子孫から買い取った。現代でも,フランス啓蒙文化を理解する上で,貴重な価値を有するコレクションである。ヴォルテール室には,蔵書が配架され,ブロンズのヴォルテール像があった(写真 1)。



写真 1 ヴォルテール像

この像は,フランス国立図書館リシュリュー館とジュネーヴ図書館にもあるが,オリジナルはフランスのものだという。1811 年には,国内の

## CONTENTS

「連邦資料保存センター(FDCC)における活動(3)-ロシアの多様な書写材料と修復・保護-		
.....吉川也志保	1	
<参加報告>第 32 回保存フォーラム「図書館における資料防災―「その日」に備える」		
.....鞭馬裕次郎	4	
<参加報告>第 5 回東京大学学術資産アーカイブ化推進室主催セミナー		
「紙資料の保存管理の実際」に参加して	.....青木留美子	6
資料紹介『文化財の放射線対策ガイドブック 2021』	.....横山道子	7

出版物を1部ずつ、図書館に納めることを定めた納本制度が始まった。2001年には、蔵書数約3310万点、うち外国図書は約605万点に上ったという。

中世の写本を含む貴重書は、ネフスキー通りに面したサドヴァヤ館にあるファウスト室に所蔵されていた。サドヴァヤ館自体は新古典主義の様式であるが、ファウスト室の室内は中世ヨーロッパの建築様式を模している(写真2)。ここでの素材は主に羊皮紙である。ロシアではかつて宮廷の公用語がフランス語であったことから、フランス語が通じることを期待していたが、現代ロシアの第2外国語はドイツ語であった。ただし、このような貴重書部門の司書にフランス語を話せる高齢の方がいらして、私とフランス語で話した時には、まるで時空を超えた出会いのような不思議な気分を味わった。



写真2 ファウスト室

## 2. ノヴゴロド歴史・考古学博物館に遺る多様な書写材料

先に述べたエカテリーナ2世以降のコレクションよりも古いロシアの書写文化を紹介するため、ノヴゴロドというロシアの古都で見ることができる蠟板と白樺文書を例に挙げる。

ノヴゴロドは、新しい町という意味を持つが、ロシア最古の都市のひとつであり、9世紀の記録にまで、その名を辿ることができる。12世紀には豊かな商業の拠点として栄え、16世紀にイワン雷帝による征服で粛清され、18世紀初頭にサンクトペテルブルクが新たに都として建造されるまでの間、商業活動の要衝であった。サンクトペテルブルクが、ピョートル大帝によって湾岸を埋立て建設された人工都市であり、西欧(西ヨーロッパ)の影響を色濃く反映しているのに対して、ノヴゴロドは、いわゆる古いロシア特有の文化の名残を伝える都市だといえる。

ノヴゴロド歴史・考古学博物館には、ノヴゴロド様式のイコン絵画が多く展示される一方で、多くの考古遺物も展示されていた。

発掘された蠟板の中には状態も良く、何が書いてあるのか判読できるものもあった(写真3)。



写真3 発掘された11世紀前半の蠟板  
詩編が記されている(筆者撮影)

蠟板はギリシア・ローマ時代から使用されていた書写材料で、ポンペイの壁画などのローマ時代の絵画にも見ることができる。西欧でも近世まで市井で使用され続けた記録はあるが当時の実物そのものを見られる機会は少ない。

次に、ロシア特有の白樺文書も多く展示されていた。白樺文書とは、この地域に自生する白樺を材料とした木簡のようなものであり、モンゴル地域では仏教の経典などに広く使用されていた書写材料である。ノヴゴロドで展示されていた白樺文書の場合、内容としては、教会の説教や、教区の書簡、ノヴゴロドとスーズダリ間の地域の紛争に関わることなどが記載されていた。(写真4)



写真4 12世紀白樺文書の展示

地理的に、ノヴゴロドはバルト海と黒海を結ぶギリシアへの道の北端に位置する。このため、ロシアの文化はギリシアからの影響を残しており、宗教面でも、カトリックではなく、正教（オーソドックス）を信仰していた共通点がある。一方で、ロシアでは、タタールのくびきと呼ばれるモンゴル帝国の来襲を受けたことは日本と共通している。

ギリシア・ローマ文化の名残のような蠟板と、モンゴルでも多く使用されていた白樺文書、そして西欧の羊皮紙とが共存していたのがロシア・ノヴゴロドの書写文化であった。

### 3. FDCC での修復活動 リーフキャストイングの発明

さて、FDCC の活動に話を戻すと、ロシア国立図書館の収蔵図書は殆んどが紙（写真 5）や羊皮紙で作られたものなので、前節で紹介したような書写材料の保存活動は行っていなかったが、ロシアの修復の歴史で何より画期的な発明であったのが、リーフキャストイングの技術である。



写真 5 手作業による修復の様子

ソヴィエト時代には特許という概念がなかったため、見学に来たヨーロッパ人に見せたところ、同じものを作られ、あちらで特許が認可されたため、ロシアには利益が得られなかったという趣旨の話を、現地の職員の方が語っていた。そのような経緯のためか、滞在中、現地の職員とは友好的関係を得られていたものの、こちらがメモや写真を気軽に取ったりすることは憚られるような、ある種の警戒感のような空気があったようにも思えた。

また、FDCC には、紙の物性を研究する実験室も備わっていた中で、科学的に安定した樹脂により、紙繊維を強化する装置もあった（写真 6）。この処置を受けた紙は、見た目には大幅な変化はなかったが、曲げたときの質感に張りがある仕上がりであった。フランスでは、そのようなことはなかったので、（見せていただいたサンプルが

たまたま状態の良いものであったのかもしれないが）特に保存上問題のなさそうな紙に樹脂を含浸する発想に、当時は、ややカルチャーショックを受けた。酸性紙の劣化進行がひどい場合には、粉状になる前に形状を保つという効果は想定できるが、樹脂の長期的な変化については注視が必要かもしれない。フランスでは、酸性紙を強化する場合、ペーパースプリット法で、中性紙を挟んで接着する方法があった。樹脂を含浸する方法も、日本は金属の考古遺物に樹脂を含浸させて保存する手法があるが、この場合は低圧にして樹脂を浸透させるので、高圧含浸という方法を採用していることにも驚いた。



写真 6 高圧含浸装置。紙繊維を樹脂により強化する目的で用いられた

### 4. FDCC での保存箱作成

資料を保存箱に入れることも、予防的保存に有効な手段である。FDCC では、保存箱作成用の装置があり、必要な寸法を入力すると、自動的に装置が展開図を作成し、裁断できるようになっていた。（写真 7）



写真 7 保存箱作成装置

## 5. おわりに

この原稿を準備しているときに、ロシアのウクライナ侵攻というニュースを聞き、ロシア帰国以来、いつかは日露間にも平和条約が締結されることを願っていたものの、ウクライナ侵攻の事実を知り、それとは程遠い現状に淡い希望もついていたかのようでした。しかし、つづく報道では、ロシア本国においても戦争反対デモがあり、ロシア全将校協会会長もプーチン大統領の辞任を要求したと知りました。

私のロシア滞在からすでに 12 年が経ちましたが、あの頃は諸地域や周辺的情勢が不安定であったこともあり、滞在直前には地下鉄テロが発生し、日常生活には支障がなかったものの、緊迫した毎日を過ごしておりました。サンクトペテルブルクの美しい街並みでは、しばしば地雷の被害者と思われる若い傷痕軍人を目にしました。在サンクトペテルブルク日本領事館の方々には、非常にお世話になり、無事に研究交流を果たし、帰国することができました。

それから、数年が経ってから、安江明夫先生からご依頼があり、日仏図書館情報学会を通じて、フランスの資料保存について講演会をさせていただきました。その時に、安江先生が在外日本資料調査に関連してロシアへご滞在されたこと知り、滞在のご感想を聞きましてところ、「あー、怖かった」と、いつもの聡明で自信にあふれた安江先生からは想像できないようなお言葉が印象的でした。

安江先生におかれましては、ここ数年の間に、国内で 3 回ほど開催された資料保存に関する私の講演会のうち、全てにご出席くださり、私が論文の脚注に掲載したフランス語の報告書の閲覧をご所望になられることもありました。先生の衰えを知らない探求心に尊敬と驚きの念を隠せませんでした。まだまだお元気でご活躍なさると思っておりましたので、突然のご逝去に心が痛みました。前回の寄稿(「FDCC における活動(2)」第 124 号)では、安江先生の追悼特集があったとは知らずにいましたので、この場を借りて、謹んでお悔やみ申し上げます。

### <参考文献>

栗生沢猛夫【ノヴゴロド】の項『日本大百科全書』小学館、1984～1994

井上治「北東アジアの白樺樹皮文化 — 環境・社会・伝統・歴史からの北東アジア学 —」『北東アジア研究』第 22 号、2012 年 3 月、p.81～106

(きっかわ やしほ・二松學舎大学非常勤講師)

※ 筆者より、第 123 号掲載の「FDCC の活動(1)」の補足修正一覧表が寄せられましたので付記します。

- p.3 セルロースの損傷の震度は低下する。  
→ セルロースの損傷度が低下する。
- p.3 色彩の脱色を惹きおこす…(中略)…図書館の光学的作用に好ましくない影響を与える  
→ 色彩の脱色をひきおこし、湿度が高いとその作用は強まる。
- p.3 サルフェイトイオン → 硫酸イオン
- p.3 紙の酸化の原因 → 紙の酸性化の原因
- p.3 紙の明度の経時変化が上昇する  
→ 紙の明度が低下する
- p.3 水化物化し → 加水分解し
- p.3 アセトアルデヒドが書籍の酸性度を低下させる  
→ これはアセトアルデヒドがさらに酸化して酢酸になって、書籍の酸性度を高める
- p.4 トルーエン → トルエン
- p.6 表 3 の「VOC 増減」は VOC 以外の成分もあるので、「大気汚染物質の増減」
- P.4 表中「塩素」の項目：  
耐火がスプレート→耐火ガスプレート

### <参加報告>

#### 第 32 回保存フォーラム

#### 「図書館における資料防災

—「その日」に備える—

2021 年 12 月 21 日～2022 年 1 月 17 日

鞭馬裕次郎

2020 年度に続き、2021 年度の保存フォーラムも事前申込制によるオンライン動画配信という形で開催された。初めての保存フォーラム参加だったが、約 1 か月間の配信期間中に自身の都合の良いタイミングで受講が可能なこの形は、個人としても取り組みやすいものであった。時世柄オンラインでの研修を受講する機会も少なくないが、本フォーラムは特にシステムの操作性が良好で、ストレスなく受講を進めることが

できた。

フォーラムでは5つの報告が行われた。

報告1は、国立文化財機構文化財防災センター文化財防災統括リーダー・小谷竜介氏による「文化財防災センターとネットワークを通じた多様な文化財の救済」。2020年10月に発足した同センターの発足に至る経緯、現在の活動内容、今後の展望が語られた。文化財の所有者と管理行政だけでなく、多様な立場の人間に関わることが災害時にも効力を発揮するとのことで、2021年10月に発生した江戸川乱歩館（三重県）での火災の際は、5種の異なる立場の人が関わっていたという事例が挙げられた。従来主であった縦割り行政の形態ではなく、防災に対応する各機関がフラットに結びつくようなネットワークの深化を推進していきたいという話が印象的で、緊急時には文化財防災の窓口として広く門戸を開いているという言葉に頼もしく感じた。

報告2は、ハワイ州立大学マノア校図書館資料保存司書・日沖和子氏による「米国の大学図書館における所蔵資料の防災の取組」。米国の大学図書館で長期間資料防災に従事した経験を基に、現実的にどのように資料防災に取り組んでいくのが望ましいかという内容であった。米国の2大学で行った、資料防災対策における組織づくり、防災備品の備蓄と更新、資料防災訓練について具体的な解説があった。資料防災に長期間継続して取り組むモチベーションを保つ方策について、「もし有望なメンバーが集まらなければ、活動を一時休止し、機が熟した時に再開するという気持ちで取り組んでもいいかもしれない」という現実的な言葉があったのは、長い実務経験に裏付けられた実直な見解ではないだろうか。

報告3は、東北大学附属図書館情報管理課専門員・真籠元子氏による「東北大学附属図書館における所蔵資料の防災について」。同館で過去10年に起きた3度の大きな災害について、災害ごとの被害状況や、被災後に講じた対策とその効果等について報告が行われた。被害状況とその後の対策が多数の記録写真によって分かりやすく示され、当事者以外が客観的に被害状況を理解する意味でも、災害時に記録を残すことの重要性を再認識した。地震対策として行った傾斜棚、書架の落下防止バー、落下防止ボックスなどの効果の有無についての報告は、実体験に基づく知見で大変参考になった。

報告4は、東京都立中央図書館サービス部資料管理課資料修復専門員・佐々木紫乃氏による「東京都立図書館における所蔵資料の防災の取

組」。同館で設定している資料防災マニュアルの特徴と構成、被災資料救済セットなど有事に備えた準備の内容等について、映像資料も交えながら報告がなされた。YouTubeで公開もされている映像資料「被災・水濡れ資料の救済マニュアル」

(<https://www.youtube.com/watch?v=svCK-yQDy0s>)は、筆者の所属元のものであるが、再見するたび資料防災意識が向上する。17分ほどの動画なので、未視聴の方には是非見ていただきたい。

報告5は、国立国会図書館収集書誌部資料保存課保存企画係長・吉井伶奈氏（概要パート）と、同館収集書誌部資料保存課洋装本保存係副主査の廣川明日菜氏（研修事例パート）による「国立国会図書館における所蔵資料の防災の取組—概要と資料防災研修事例」。

前半の概要では、同館で策定されている資料防災計画・対応マニュアルの具体的な解説、本フォーラムを始めとしたイベントの開催、他機関への協力活動について、後半の研修事例では、同館の実際の防災活動を基に、予防・準備・対応・復旧の4つのステップをどのように進めていくかの講義が行われた。前後半で80分近いボリュームがあり、同館における資料防災対策の概観のみならず、資料防災対策の基礎知識の復習としても優れた内容だった。報告資料は見やすいデザインに加え、参考文献のURLも多数併記されていたのがありがたい。

報告1では、近年災害が増加し、（統計機関にもよるが）1970年代と現在を比べると3倍以上の件数が発生しているとの話があった。コロナ禍にあって資料防災に関する予算が削減される機関も少なくないだろうが、図書館における資料防災の重要性は今後さらに増していくであろう。明日にも起こりうる「その日」に備え、本フォーラムの内容を糧とし、引き続き気を引き締めて資料防災に取り組んでいきたい。

なお、フォーラムの概要・報告資料等は下記URLで公開されている。

<https://www.ndl.go.jp/jp/event/events/preservationforum32.html>

（むちま ゆうじろう・東京都立中央図書館）

## < 参加報告 >

### 『第5回東京大学学術資産 アーカイブ化推進室主催セミナー 「紙資料の保存管理の実際」』 (2022年2月10日)に参加して

青木留美子

2022年2月10日(木)13:30~17:00に第5回東京大学学術資産アーカイブ化推進室主催セミナー「紙資料の保存管理の実際」が、オンラインにて開催された。

登壇者は東京大学史料編纂所 高島晶彦氏、東京大学文書館 秋山淳子氏、東京大学附属図書館 中村美里氏、東京大学経済学部資料室 小島浩之氏で、4人の講演の後、小島浩之氏がコーディネーターを務め、他の3人によるパネルディスカッションが行われた。

まず、東京大学史料編纂所の高島晶彦氏から、「紙資料の現物保存の実務(修理を中心に)」と題して、東京大学史料編纂所技術部(修理室)が行っている史料編纂所所蔵資料の修理の概要についての講演が行われた。

当技術部の1998年以前の修理は、資料の公開と取扱い易さを重視した裏打ちを基本としたもので、修理に使用する材料は、市販の和紙や似寄りの時代紙(江戸時代から明治時代の版本や帳簿の裏打ち紙や白紙部分)を使用していた。

しかし1998年以降、所蔵資料の重要文化財や国宝指定が相次いだのを機に、修理方針の転換が図られた。新しい修理方針のもとでは、当初の形態や痕跡、風合い等を極力残し、裏打ちを施さずに、本紙の紙繊維分析をもとに本紙に近い補修紙を復元作製して補修を行うことになった。これにより、本紙に負担の少ない調和のとれた修理ができるようになった。また、資料によっては、修理の施工は外部業者である国宝修理装飾師連盟に加入している工房に委ね、調査や監修を史料編纂所技術部が行っている。

その他、料紙の繊維や<sup>てんりょう</sup>填料であるデンプン等の構成物の多角的な研究も進めており、目視や透過光、顕微鏡観察を行い、データを蓄積することにより、古文書料紙分類の基準の作成・公開を目指しているとのことであった。

資料の修理方針の転換という大きな決断には、大変なご苦労があったと推察するが、さらに古文書料紙研究にも取組まれており、今後の研究の成果が期待される。

次の東京大学文書館 秋山淳子氏の「紙資料の現物保存の実務(IPMの取組)」の講演では、東京大学文書館における文化財IPMの取組の紹介が行われた。

活動は職員による資料受入れ時の殺虫処置、ゾーニングや書架はめ込み式保存箱による保存環境の整備、データロガーによる温湿度管理、粘着トラップのモニタリングによる害虫対策等その他、専門業者によるガス燻蒸やカビ除去処置なども組合せて行っているとのことであった。

特に注目されるのは、文書館の建物が一つの独立した建物ではなく、本郷キャンパスの医学部1号館の1~2階と柏キャンパスの総合研究棟の6階を間借りした形をとっている点であった。研究室用の建物での資料の保存は施設上の限界があり、「できることは何か」を考え取組んでいる、という言葉が印象に残った。

図書館でも商業施設の中に設置されたものや、他の目的で建てられた施設を改装して図書館として使用している例等もあり、「できることは何か」を考え、継続的な観察や管理により柔軟にIPMに取組む姿勢は、図書館にも取入れられる点であると思った。

3人目の東京大学附属図書館 中村美里氏からは「改修工事からみる総合図書館の資料保存」と題して、東京大学附属図書館の総合図書館別館の新設や本館の大改修工事等に係る資料の再配置を中心に説明があった。

再配置は事前に配置方針や計画がまとめられ、計画に沿って資料配置が進められた。移動する資料には背ラベルに目印をつける工夫や、書庫に入れる前に資料のクリーニング等も行われた。

また、貴重な和漢古書については、計画当初から保全のための利用条件の検討を行い、利用頻度が高い部局の教員にも意見を伺ったうえで、大幅な利用条件の変更も行ったとのことであった。

講演の最後には、総合図書館内で行っている簡易補修や、劣化の進行を防ぐ手当てについても紹介が行われた。

図書館の老朽化による改修工事や新設等は、多くの図書館にとって通らねばならない道であるが、そのタイミング生かして、資料のクリーニングや資料の利用条件の見直しの機会にしている点には、感心させられた。また、新設の自動書庫は竣工後に湿度が高い状態が続く、枯らし期間に1年近くかかったという話は、大変興味深かった。

最後の東京大学経済学部資料室の小島浩之氏の「紙資料の現物保存の理論」の講演では、紙は有機物を含む高分子化合物、書籍は有機高分

子の複合体であり、劣化も化学変化の一種と捉えられるとの説明が行われた。

紙自体に含まれる成分や紙のサイズ剤による酸性劣化やインク焼けの酸化劣化、革装本のレッドロット等も化学反応による劣化であり、高温高湿の環境下では化学反応が促進されるので、水・温度・酸の制御が重要である。その他、カビ等の生物被害や取扱いによる劣化もあり、多様な要因が複合的に働いて劣化が起こることであった。

次に図書館資料保存に関する理論的枠組みとして、①修復の4原則、②段階的保存プログラム、③IFLA 資料保存の原則、④IPM（総合的有害生物管理）、⑤プリザベーションとコンサベーション、⑥保存ニーズの6点を取上げ、それぞれについて説明が行われた。

紙や本、劣化への化学的なアプローチや、IFLA 資料保存の原則が、資料への具体的処置から予防的処置に次第に変化していったという説明は興味深かった。また、資料を1点ずつ見る視点と資料全体を見る視点、両方の視点を持つ必要があるという言葉が印象に残った。

パネルディスカッションでは、主に講演中の質問に回答しきれなかった質問回答が行われた。

講演の多くは、講師の実体験に基づく具体的な内容で、普段は知ることができない他機関の資料保存の取組を知ることができ、大変有意義であった。また、どの講演にも多くの質問が寄せられ、視聴者の関心の高さが伺われた。

最後に、本セミナーはコロナ禍のこれまでにない規模の感染拡大が続く第6波の中、また、関東地方では雪やみぞれの降る悪天候という状況での開催であった。視聴者にとっては、オンライン開催のありがたさをより強く感じられたセミナーとなった。この場をお借りして感謝申し上げます。

なお、本セミナーは今後アーカイブ公開される予定である。

(あおき るみこ・国立国会図書館  
収集書誌部資料保存課)

## 『文化財の放射線対策ガイドブック 2021』



- 監修：佐野千絵，編集：内藤百合子・岡田健
- 発行：独立行政法人国立文化財機構文化財防災センター
- 2021.12
- 132頁
- 全文データは、以下 URL よりダウンロード可

<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/115131>

### ●目次

- 序 / 文化財の放射性物質汚染への対策とは / 関係法規等 / 参考にした手引き等
- I. 放射性物質漏えい事故が発生した場合の文化財等収蔵・展示施設における対応について
1. 緊急時の対応 / 2. 施設の汚染状況の点検・評価 / 3. 放射性物質を除去する
  4. 開館へ向けて / 5. 文化財等収蔵・展示施設として 日常とるべき放射線対策

## II. 放射線の測定方法と除染の詳細

1. 放射線の測定方法 / 2. 除染の詳細

## III. 被災地域外から放射性物質汚染が確認されている地域へ応援に行く場合

### ー 文化財レスキューのための手順

1. 人員を派遣するにあたって / 2. 作業計画を立てる
3. 作業手順 / 4. 注意事項 まとめ

## IV. 福島第一原子力発電所事故への文化財分野における対応の記録

1. はじめに / 2. 展示・収蔵作品の安全性の確認
3. 福島県内避難指示区域からの文化財等救出活動 / 4. おわりに

## V. 資料編

2011年の原発事故後、約3年間、東京文化財研究所を中心としたプロジェクトチームは、文化財等収蔵・展示施設における放射性物質への対策・方針を検討し、各種の作業を実施した。本書はその成果を項目ごとに（事故直後の対応、館内外の汚染の調査、放射性塵埃の除去方法など）整理したものである。当時の関係者の活動も記録されている。ガイドの内容はわかりやすく読みやすい。

「対応の記録」と47ページに及ぶ「資料編」からは前代未聞の状況下での試行錯誤が感じられ、歴史的な記録としても意義深い。

活用の機会がないことを願う、他に類のない貴重な資料である。

（横山道子・資料保存委員会委員）

### 資料保存委員会の動き

#### 2022年1月例会

日時:2022年1月13日(木)  
場所:日本図書館協会会議室  
出席:10名(うちオンライン参加3名)  
内容:

#### 報告事項

- ・資料紹介  
「文化財の放射線対策ガイドブック2021」
- ・開催報告  
埼玉県三郷市ふれあい文庫サポーター講座

#### 協議事項

- ・ネットワーク資料保存127号 原稿案
- ・2022年度108回全国図書館大会 テーマ案

#### \*2月定例会中止

#### 2022年3月例会

日時:2022年3月23日(水)  
場所:日本図書館協会会議室

出席:9名(うちオンライン参加4名)

内容:

#### 報告事項

- ・ネットワーク資料保存127号進捗状況
- ・2021年度107回全国図書館大会  
参加者1,336人/記録について

#### 協議事項

- ・ネットワーク資料保存128号 原稿案
- ・2022年度108回全国図書館大会  
スケジュール確認/テーマ案

---

ネットワーク資料保存 第127号 2022年3月

編集・発行:日本図書館協会 資料保存委員会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03-3523-0816 FAX03-3523-0841

URL <http://www.jla.or.jp/committees/hozon/tabid/96/Default.aspx>

文章・写真の無断転載はお断りいたします。

---